徒然草

奥山に猫またといふものありて　―現代語訳―

「奥山に猫またというものがいて、人を食うそうだ。」とある人が言ったところ、「山ではなくても、この辺りにも、猫が年を経て変化して、猫またになって、人（の命）を取ることがあるそうだな。」と言う者がいたのを、なんとか阿弥陀仏とかいって、連歌を詠むことを仕事としていた法師で、行願寺の辺りに（住んで）いたのが聞いて、（自分のような）ひとり歩きをするような者は、気をつけなければならないことだと思っていたちょうどその頃、ある所で夜遅くまで連歌をして、ただひとりで帰ってきたときに、小川のほとりで、噂に聞いた猫またが、狙いを外さず（法師の）足もとにすっと近寄って来て、すぐに飛びつくと同時に、首の辺りを食おうとする。（法師は）正気を失って、防ごうと思うが、力も出ず、足も立たず、小川に転げ落ちて、「助けてくれよ、猫まただ、猫まただぞ。」と叫ぶと、（近くの）家々からたいまつをともして（人々が）走り寄って来て見てみると、この辺りで（顔を）見知っている僧である。「これはどうしたことか。」と言って、川の中から抱き起こしたところ、連歌の会での賞品を得て、（その）扇や、小箱など懐に持っていたものも、（川の）水の中に入ってしまった。九死に一生を得て助かったという様子で、はうようにして家に入っていった。

（実は、法師の）飼っていた犬が、暗かったのに主人（が帰って来たの）を分かって、飛びついたのだったということだ。